

平成 30 年度 食育推進に係る実践報告書

学校名	大崎上島町立大崎小学校
-----	-------------

1 学校における食育の現状（昨年度からの課題等）

今年度より栄養教諭が配置され、より充実した食育推進に努めることが可能になった。保健委員会では養護教諭の指導により食育月間や全国学校給食週間等で食育を推進していたが、授業での食に関する指導は、主に学級担任が行っていた。

児童は、町内独自の地域連携型教育プログラム「大崎上島学」により、地場産物に触れる機会が多く、食に対して興味・関心が高い。給食の残食率も低く、生徒指導部主導による給食指導が各学級担任を中心にされていた。そのため、食物を大事にし、感謝する心を持っている児童が多くいると考える。

2 学校の食育に係る目標（成果指標・目標値）

○他の教職員と連携した食に関する指導の実施

- ・学級担任及び専科教諭と連携し、ティーム・ティーチング（以下、T. T.）での授業を実施する。
- ・養護教諭と連携し、各学年に応じた食に関する指導を行う。

○町内メニューコンテストにおける食育推進

- ・町教育委員会主催のメニューコンテストの受賞レシピを学校給食で提供し、家庭へ情報発信をする。

3 食育の目標に対する具体的な取組

【取組 1】（テーマ） 他の教職員と連携した食に関する指導

- ・学級担任及び専科教諭と連携し、T. T. での授業を実施する。

専科教諭と連携し、第5学年の家庭科の授業を複数回行った。家庭科は、食に関する指導を行う中核的な教科であるため、学校給食を関連させ、児童により食生活を身近に感じてもらい、家庭生活の中で総合的に捉えられるよう工夫した。



- ・養護教諭と連携し、各学年に応じた食に関する指導を行う。

毎月、養護教諭が、体重測定後に行っていた保健指導に、食に関する指導を追加した。正しい箸の持ち方ができるようになることを目的とした「おはし検



定」の実施や、第5学年の社会科「わたしたちの食生活と食料生産」と関連させ、米の構造や栄養等の食に関する指導を行った。



【取組2】(テーマ) 町内メニューコンテストにおける食育推進

町教育委員会主催のメニューコンテストも今年度で5年目の開催となった。児童生徒の食に対する興味・関心を深めることを目的として、町内の小学校第5学年と6学年及び中学校全校生徒を対象に給食メニューを募集した。今年度のテーマは、日本人の大切なタンパク源であり加工食品も多い「豆・豆製品」とし、事前指導を町内の栄養教諭2名で行った。調理員が実際に調理して試食とメニューの審査を行い、食生活改善推進員とも連携した。

募集に際しては、家庭の協力をいただき、実際に調理した児童生徒も多く見られた。食べるだけでなく、調理への関心も高まっているようである。実際に、受賞メニューを学校給食で提供すると、「友だちが考えてくれたメニューだから、残さず食べようという気持ちになった。」等の感想があり、食物を大事にし、感謝する心を育む機会になっていたと考える。

また、町広報紙にも学校給食の特集とともに取り上げてもらった。2月には地元の産業文化祭「すみれ祭り」で受賞メニューのレシピ配布を行い、どちらも家庭・地域への情報発信へつながった。



4 「ひろしま給食100万食プロジェクト」の取組について

町内の小学校第5学年はキャッチコピーを、第6学年及び中学校全校生徒についてはキャッチコピーとメニューの両方を考案するよう募集を呼びかけた。そのうち小学生に対しては、広島県産の食材について事前指導を行った。前年度に受賞した児童もあり、児童生徒らは町内の食材を使用する等、意欲的に取り組んでいた。

学校給食においては、昨年度に引き続き、ひろしま給食100万食プロジェクトの受賞メニューを毎月1品以上に取り入れるよう町内の全調理場で統一した。また、今年度の全受賞メニューを10月及び1月の学校給食で提供した。家庭への啓発活動として給食だよりで紹介したり、食数調査を依頼したりした。保護者からの想の中には、「一緒に料理をする良い機会になった。」「アレンジを加えてみた。家族みんなでおいしくできた(作られた)。」等が寄せられ、家庭でも積極的に取り組んでいただけたと考える。



5 取組に対する成果と課題

【成果】

T. T. で授業を実施したことにより、家庭科の学習へ、今まで以上に食育の視点を位置付けられた。また、学校給食を活用したことで、給食時間中に栄養教諭に対する会話や質問が増え、年度当初と比較し、児童の食に対する興味・関心がさらに高まってきたと考える。

町内メニューコンテストでは、町役場住民課人権・広報係と連携して家庭だけでなく地域にも情報発信を行うことができた。保護者や地域の方から、「広報見たよ。」と声をかけられ、情報発信の大切さを改めて感じた。

【課題】

今年度は単発の取組がほとんどであった。よりよい食育推進を行っていくには、成果指標や目標値を設定して、計画的かつ組織的に取り組む必要がある。また、それらを学級担任らと連携し、客観的な評価を行うことも大切である。PDCA サイクルに基づき、食育推進を行っていけるよう、栄養教諭を中核とした食育推進体制を整えていくことが次年度以降の課題である。

6 今後の取組に向けた改善方策について

校内での食育だよりの発行ができず、家庭への情報発信が不十分だったと考える。本校では、児童が学級園で野菜の栽培を行ったり、大崎上島学で地元の農家や食品会社へ見学したりする経験も多い。児童の教育活動を食の観点から家庭へ情報提供し、家庭への食育の意識付けや地域と連携した食育推進を行っていく。

日々の給食指導で児童の様子を見取ると、食べる時の姿勢や箸の持ち方等に課題がある児童が多い。給食指導で声掛けをすると、その場で直すことはできている。しかし、翌日になると元に戻ってしまい、定着できていないのが現状である。これらは、食の大部分を担う家庭での実践が必要不可欠であるため、家庭への啓発を行っていききたい。また、給食指導で児童への意識付けを継続することはもちろん、成果指標や目標値を設定し、学校全体で取り組んでいく。

その他、給食用物資の地元納入業者や町内在住の方々に聞き込み調査を実施したところ、町内には郷土料理がなく、地域に根付いた昔から食べられている料理もない、という情報が得られた。児童らも、郷土料理という言葉になじみがなく、広島県の他地域の郷土料理も知らない様子だった。各地域の食文化を理解させるためにも、学校給食で意図的に郷土料理を提供し、給食だよりや給食指導で児童生徒へ情報発信をしていく必要があると感じている。